



新春対談 特集

# アジアの世紀を生き抜く

「21世紀はアジアの時代」ともいわれるまでに、世界の中で力を増してきたアジア。しかし、経済発展をはじめとするその成長を牽引してきたはずの日本が低迷を続けている。日本はこれからどのような成長を目指すのか——。開発経済学者として長年アジアの成長を研究してきた渡辺利夫氏に、これからの日本が歩むべき道を聞いた。

(月刊「OISCA」編集部)

渡辺利夫 × 中野悦子  
 拓殖大学学事顧問・前総長      オイスカ理事長

**What's OISCA**  
 オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立され、現在35の国と地域に組織を持つ国際協力NGOです。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。



**OISCAの標章**  
 オイスカの世界観がこの標章に象徴的に表されています。天(青)、火(赤)、水(水色)、地(黄)、それにこの4要素を調和的に活動させ、人類万物のいのちを生成発展させる源である「宇宙」を表す黒です。

**OISCAという名称の意味**  
 Organization 機構  
 Industrial 産業  
 Spiritual 精神  
 Cultural 文化  
 Advancement 促進  
 人間の生存に不可欠な三要素「産業・精神・文化」のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。

**今月の表紙写真**  
 Photo by Rikio Hiramia  
 ラバウル・エコテック研修センターの30周年記念式典では、色鮮やかな衣装に身を包み、ボディペイントをした何十ものグループが、踊りを披露。踊りには部族や地域の文化が色濃く残されています。  
 (バブアニューギニア)

**中野** 今日はお忙しい中、ありがとうございます。渡辺先生には2017年6月にオイスカの会長にご就任いただきました。これまでも先生の著書や講演などに触れ、いつかじっくりお話を伺いたいと思っていましたので、今日の対談を楽しみにしていました。全国の会員の皆さんにも渡辺先生の思いやお考えをお伝えしたいと思いますので、対談といながらも今日は聞き役に徹して、先生にいろいろなお話を聞いていただきます。

ところで、昨年10月には、四国研修センターの設立50周年を記念した講演会で講師を務めていただき、ありがとうございました。渡辺 式典も盛大で楽しませてもらいましたが、その翌日にもう一つよい体験ができました。オイスカとは直接関係はないのですが、実は尾崎放哉という俳人のことを集中的に勉強した時期に、放哉が晩年を過ごした小豆島に頻繁に通っていたんです。その度にお世話をしてくださった方が亡くなった時、通夜も葬式も





開発経済学研究所の素材を求めて、アジアの各国を歩く歩いてきた1970年代の中頃。ラングーン(現在のヤンゴン)の旧市街区あたりで撮影したものと思われる(渡辺)

## アジアの成長モデル

えるのではなく、大事なのは直感だと思います。匂いとか活気のような、理屈ではない「美感」を伴った韓国での体験がきっかけになったんです。アジア停滞論が主流だった中で、「日本が残した成果と同じものを、韓国もやり遂げるだろう」と直感したのですが、やはり直感と体験は原点ですよ。世に一般的な韓国論は、「軍部独裁」財閥支配、対米従属の3つで語られる絶望論ばかりでした。「よし、この絶望論と戦ってやろう」と、本気で韓国のことを勉強し始めました。ハンゲルも習得し

て、最終的には「現代韓国経済分析」という本を書きました。韓国の発展は、アジアのモデルだと説明して、輸出志向型工業化と名付けました。国内のマーケットは小さいが、やる気のある労働力はふんだんにあるし、隣の日本の産業のこともよく理解してました。中小・零細企業の部品や原材料を日本から導入して、活力ある労働力が中間製品を最終製品に仕上げ、アメリカという巨大市場に売っていく。これが「輸出志向型工業化」。すると台湾が同じことを始め、

1960年代後半ぐらいでしようか。東京オリンピックに前後して、大学院に行き、アジアのことを本格的に勉強しようという決意を固めました。当時のアジアといえば、「なぜ停滞するのか」が学界の研究テーマの中心でした。恩師の影響で私はまず、韓国について勉強しました。当時は日本も貧しかったですが、韓国の状況はその比ではありませんでした。漢江沿いにスラムが並び、いたるところで不潔な臭いがしていました。その分、活気もすごかった。私は1939年生まれですから、闇市の様子も多少は知っていて、あの時代と同じ、混沌とした活気、みなぎる活気を感じました。

中野 人口も増え、経済成長も著しい時代でしたね。2000年代以降はBRICs(ブラジル、ロシア、インド、中国)の台頭が脚光を浴び、特に中国はGDP(国内総生産)で日本を抜いて、世界第2位に躍り出ています。その頃の中国はどうだったのでしょうか。

中野 先生著書の中でも、やはりインパクトがあったのは「成長のアジア 停滞のアジア」ですね。ご執筆から30年以上が経過していますが、その間、大きく変化してきたアジアを開発経済学の専門家として、どのように捉えていらっしゃるのですか。

渡辺 僕が研究を志したのは、香港、シンガポールとつながっていき、のちにこの4カ国・地域がNIEs(Newly Industrializing Economies/新興工業経済圏)と呼ばれるようになります。私は中進国と名付け、「アジア中進国の挑戦」という本も書きました。この段階になると、アジア成長論に対して「その通りだ」という反応が始め、気がついたら、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、つまり当時のASEAN(東南アジア諸国連合)のほとんどの国が輸出志向型工業化の路線に入ってきました。大変な成長率でした。企業の主体は民族資本ではなく、外資、特に日本からの資本がどんどん入り、現地の安い土地と優秀な労働力が加わって、その発展を支えたのです。

## 直感を信じて

多くいたようです。ただ、実際に本人に会ってみたら、みんなガツクリ来たと思いますよ。とにかくハチャメチャですから。放散が生きた時代は共同体があった戦前期の日本です。今だったら放散のような人間が生きていく空間はないのでしょね。自分では生産的なことは全く何もしないですから。でも、そんな男が何十年経っても我々を惹きつけているというのは、うらやましくもありますよ。

中野 会ってみましたが、どうも僕には会いたくないな(笑)

中野 先生著書の中でも、やはりインパクトがあったのは「成長のアジア 停滞のアジア」ですね。ご執筆から30年以上が経過していますが、その間、大きく変化してきたアジアを開発経済学の専門家として、どのように捉えていらっしゃるのですか。

中野 私オイスカの創立者であり初代総裁である中野與之助翁に同行して最初に行ったのが台湾でした。当時はアジアの活気というものがよく分かります。日中国交が成立して日本が台湾と断交した2、3日後のことでした。創立者は常々、日本と台湾は「運命共同体だ」と話していて、この時も国同士が断交しても民間は交流すべ

きだとの信念から、すぐに出かけて行きました。渡辺 そのタイミングで行かれたとはすごいですね。蔣経国総統の時代でしょうか。反日的な動きはなかったですか。

中野 台湾では創立者の考えや行動が称えられましたし、市民からの反発なども一切ありませんでした。町中を自由に歩いて、表通りだけではなく路地に入ったりもしていました。先ほど先生がおっしゃっていた活気を、そういうところで感じました。市場や屋台などにたくさん食べ物が並んでいましたが、40年も前のことで私も若かったものから、衛生面が気になって

「こういうところでは買いたくないな」と正直思いましたし、日本では見慣れない食材や、それらを調理する時のむわつとするような臭いが気になりました。でも人々の生活が感じられる路地裏に、活気というか逞しさを感じました。

渡辺利夫(わたなべ・としお)

1939年、山梨県生まれ。慶應義塾大学を卒業後、同大学院博士課程を修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を歴任後、拓殖大学国際学部長、学長、総長を務め現在は学事顧問。「成長のアジア 停滞のアジア」ほか多数の執筆を手掛けており、自らを「Born Teacher(生まれながらの教師)」と称する教育者でもある。



## 衰退期の日本

中野 今後は、中国がアジアの成長を牽引していく構図になっていくのでしょうか。

渡辺 NIEsが日本を、ASEANがNIEsを、そして中国がASEANを追い上げるという重層的なキャッチアップでアジアの発展が進みましたが、今はそれが一巡したところなんです。私は成長期のアジアを勉強できて、自分が立てた発展シナリオの有効性を彼らが立証してくれた。非常にダイナミックな時代でしたが、これからは違います。人間に生成、成長、成熟、衰退、そして最後には死というライフサイクルがあるように、国の発展も同じです。日本、NIEs、ASEAN、中国の順序で発展してきて、その順序で衰退期に入ります。経

済面だけではなく政治もです。韓国では所得水準が上がり、中産層が大きくなりました。その過程で国民が極めて多元化したことはいいのですが、国民が一丸となって国を発展させる力が弱まってしまった。アジア全体から力強さが消えてきましたね。明らかに日本がその先頭結果です。だから貧しい時代の方が、国家と国民が一つの価値を共有して力を発揮でき

SEANがNIEsを、そして中国がASEANを追い上げるという重層的なキャッチアップでアジアの発展が進みましたが、今はそれが一巡したところなんです。私は成長期のアジアを勉強できて、自分が立てた発展シナリオの有効性を彼らが立証してくれた。非常にダイナミックな時代でしたが、これからは違います。人間に生成、成長、成熟、衰退、そして最後には死というライフサイクルがあるように、国の発展も同じです。日本、NIEs、ASEAN、中国の順序で発展してきて、その順序で衰退期に入ります。経

済面だけではなく政治もです。韓国では所得水準が上がり、中産層が大きくなりました。その過程で国民が極めて多元化したことはいいのですが、国民が一丸となって国を発展させる力が弱まってしまった。アジア全体から力強さが消えてきましたね。明らかに日本がその先頭結果です。だから貧しい時代の方が、国家と国民が一つの価値を共有して力を発揮でき

SEANがNIEsを、そして中国がASEANを追い上げるという重層的なキャッチアップでアジアの発展が進みましたが、今はそれが一巡したところなんです。私は成長期のアジアを勉強できて、自分が立てた発展シナリオの有効性を彼らが立証してくれた。非常にダイナミックな時代でしたが、これからは違います。人間に生成、成長、成熟、衰退、そして最後には死というライフサイクルがあるように、国の発展も同じです。日本、NIEs、ASEAN、中国の順序で発展してきて、その順序で衰退期に入ります。経



たんですね、日本でいうなら明治時代。後ほどそのお話もしたいと思います。

**中野** 確かに今の日本人の多くは「国家」というものを意識していませんしね。

**渡辺** 戦後の憲法が個人の権利というものを強調している一方、共同体、国家というものに高い価値付けをしていないから、国民の意識の中で国家意識が希薄化しています。同じような状況にアジア各国も入りつつあるのを、少々苦々しい思いと、時代としては仕方がないのかという思いで見えています。アジアの変遷の過程で、どの国もいずれ衰退化していくのですよ。最後発の中国も青春時代がはつぽつ

と終わって、我々の社会が苦しんでいる少子高齢化のような厄介な諸問題に直面する段階にきているのではないのでしょうか。

**中野** 特に中国には一人っ子政策がありましたから。

**渡辺** 一人っ子政策は都市部においてパーフェクトな形で完成しました。でも、人口構造を政策的に変えることは、由々しいゆがみを生じさせることにやっとな気が付いて、この政策を廃止することになりました。でももう元には戻りません。都市においては夫婦と子ども一人で生活するスタイルができあがっていますよね。政策が廃止されたから二人産むという動きは出てきま

せん。少子化は人民解放軍の実力にも影響を及ぼすともいわれ、明らかに苦悩の段階に差し掛かっているのだと思います。

**中野** 国や地域が成長、成熟し、さらには衰退をしていくという流れがとてよく分かりました。それにしてもアジア停滞論が主流だった時に、アジアの経済発展を予測して成長論を唱えられた先生の見識の高さには脱帽です。

**渡辺** 先ほどお話しした通り直感でしたが、結果から振り返れば、悪い選択をしたとは思いません。スタートは韓国ですが、東南アジア、インドなどを含めて、最後には中国です。地を這うようにアジアを見て回ったことが、私の開発経済学の基礎には常に埋め込まれています。

**中野** アジアの成長が一巡したと表現されていましたが、どこの国でも成長し、同じ道をたどるものですか。

**渡辺** そうですね。私はアフリカやラテンアメリカのことを深くは知りませんが、条件が整いさえすれば必ず発展するはずですよ。韓国のように発展しないだろうと思ってい

たASEANの国が、あつという間に韓国を追い越すほどの力量を持つを見てきました。技術がカエル跳びをするような時代に入りましたからね。

**中野** 最初は少しずつでも、ある時点で急に発展していくということでしょうか。

**渡辺** そう、まさにカエルがピョンと跳ぶように。ただ、発展段階をスキップするような発展の在り方には、きわどい面もあります。成長が速い分だけ衰退も速いということはあるのです。

私はマレーシアの発展にも関心を持っていました。ゴムのプランテーションがたくさんある国です。1900年代にアメリカでT型フォードが量産されるようになり、ゴムタイヤとチューブの需要が増加したことに端を発します。原生林から樹液を採取してゴムを生産していたのでは間に合わない、イギリスの資本がマレーシアの西海岸をすべてゴム林にしてしましました。それに神様は

## それでも日本に学ぶ

どうしてマレーシアにこんな幸運を与えたのかと思ってしまうのですが、マレー半島は国際錫鉱山帯と呼ばれるスズの産出地帯で、その生産量は世界最大を誇っています。人類最初の保存食である缶詰は、スズ引きをしてさびないようにしているのです。缶詰が普及すると爆発的にスズ需要が高まったわけです。そうした天然資源に頼っていた国が、ASEANの中で、タイに次ぐ工業発展を遂げて、気が付けば2020年には先進国水準になるという「ビジョン2020」を打ち出し、恐らくそれは実現しそうですね。外資と同時に入ってきた技術を使いこなして、一級国に劣らぬ工業発展水準に達している。今ではハイテク工業製品が経済を支えています。この発展モデルは、先ほどお話ししたカエル跳びそのものなものです。しかし、これはいつまでも続くものではありません。

でちょうど50年になりました。オイスカ独自の研修センターで行っているのは農業研修ですが、もともとアジア諸国から求められていたのは工業技術の習得を目的とした研修でした。少しでも国の発展に貢献したいと、若者たちが一所懸命に技術の習得に励むのを支えてくださったのは全国のオイスカの会員の皆さんでした。でも技術以上に彼らが学んだのは、日本人の勤勉な姿勢、仕事に対する真摯な態度なんです。社長さんが誰よりも早く出勤してお掃除をしているのを見て驚いたというような話もよく聞きます。

**渡辺** まさにルックイースト政策の成果の一つでしょうね。マハティールさんは、マレー人の優遇政策にも力を入れていました。同国には先ほどお話ししたスズ鉱山やゴムプランテーションがあつて、かつては中国人やインド人が労働者として多く流入してきていました。そうした背景もあつて形成されていった多民族社会の中で、マレー人は政治的にあるけれど、経済的に中国人とインド人に非常に後れを取っていると、彼

は感じていました。そして、なぜマレー人がこんな地位にあるかという点、これは彼の著書「マレー・ジレンマ」にも書いてあるのですが、遺伝子構造からして劣っているといるのです。彼はもともと医者だったんですね。こんなことを書いたからその本は発禁になりましたが、自身がトップになつてからは解禁しています。それゆえマレー人の優先政策の一つは教育です。最高学府であるマラヤ大学への入学の際に、マレー人には下駄を履かせました。留学に關しても、今は随分開放されましたが、当時はマレー人以外は海外に出しませんでした。マレー人の手でマレーシアを発展させよう、そのために海外から積極的に学ぼうと、そういう気概においては素晴らしいものがありました。

## 明治人の気概を持つ

日本にもこのような気概を持った人たちが生きる時代がありました。明治維新の頃です。日本の江戸時代は、二百七十余もの藩がある分権的な社会でしたが、これを廢藩置

允とか伊藤博文といった維新の指導者たちを引き連れてです。そして「留守政府」は西郷隆盛という器の大きい人物が務めました。あいつに任せれば留守は何とかなる、治めてくれると。一方で方向を誤ったら国が潰れかねないような行動を、ものすごい熱意をもって推し進めるんです。すごいことだと思えます。この時代には、殖産興業・富国強兵といった欧化政策が躊躇なく行われていました。トップが、文明のあらゆる諸側面を見て、それを導入しようとして進めたわけですよ。道路や港湾、鉄道のよ

うな物的なものは分かります。比較的簡







海外研修生と農業体験を行う大学生(四国研修センター)

唯一無二の母親としての存在の方に重点を置くこと、女性の「お母さんとしての価値をもっと高く評価しなければなりません」。

**渡辺** 確かに、母親にしかできないことを犠牲にして労働市場に出てもらっているのが現状です。長い目で見た日本の将来のためにはならないでしょうね。核家族が進んだ上で、女性が外に働きに出ようというところになったら、子どもは保育園にしか行くところがないわけですね。だから女性に労働市場に出てもらうためには、家族政策が必要です。特におじいさん、おばあさんが一緒に住んで、孫の面倒を見てくれるというような条件を作らなければ、と思います。

**中野** 同感です。仕事が遅くなったから延長保育をお願いするというのはなく、昔のように三世帯一緒の家庭で、おじいちゃん、おばあちゃんたちが孫を見れば、子どもの情緒も安定しますよね。

**渡辺** そう思います。昨年、上野動物園で生まれたパンダが注目を集めましたね。あの母親パンダを見ていると分かりますけど、自然生命体はみ

んな同じ理屈で生きていて、生まれて一定の期間は、徹底的に母親が赤ちゃんをかわいがります。人間も同じです。子どもは親から受けるべき愛情には、ある特定量があります。私はよく「肯定的自我」と「否定的自我」という言葉を使いますが、自分が家族に受容されているという感覚があれば、自立した成長ができる。しかしそうでない場合、成長の過程で人格に何らかのゆがみが出てくる可能性があります。

戦中の日本を嫌いになるようなものになっていきます。私は教科書をつくる立場にもいますから、いろいろなものにも目を通しますが、ひどいものも多いんです。これでは否定的自我をつくり出す教育を国が敢えてやっているのと同じこととです。

一方でグローバル人材の養成なんてことがいわれていますが、日本を否定するような

教育を受けた人材が、グローバルに活躍できるんでしょうか。矛盾を感じます。真のナショナリストでなければ本当のインテリナショナリストにはなれないといつも思いますし、学生にもそう話しています。その話の流れの中で、拓殖大学に関係のある新渡戸稲造の話もしています。彼は国際連盟の事務次長まで務め、「ジュネーブの星」といわれた人物ですが、「背広を着たサムライ」とも呼ばれていました。「武士道」を書いた「背広を着たサムライ」として、尊敬を受けていたようです。それは、彼がやはり徹底したナショナリストであったからだと私は学生たちに話しています。

**中野** オイスカはNGOとして国際協力を進めていく中で、やはり日本に根っこを持つというのを常に意識してきましたし、海外から来て日本に学ぶ研修生たちにも同じように指導しています。だから国内研修センターでは毎朝各国の国旗を掲揚し、研修生たちは自国の国旗に敬意を払い、仲間の国の国旗にも同じように接しています。

いったのか。やはりそこには日本のODAが厳然としてあったからなんです。日本のODAの多くが、産業発展のための基盤をつくらうと、鉄道、高速道路、テレコミュニケーションのネットワークというようなインフラの整備に貢献し、90年代には、ODAの拠出額は世界最大になりました。現在の中国の発展がすごいというけれど、沿海部の主要なインフラは、ほとんど日本が投資してつくったものです。そこに外資が集中し、次第に民族資本も入ってきて、産業集積が次々にできあがるという構図になっているわけです。

しかも、みんな円借款でやってきた。当初、国会では各国における評判がよくないものだと議論もありましたが、何十年後かには、元本、利子ともに返済を終えるという原則に沿うように、効率的に経済を運営する癖が彼らの中に根付きました。中国はその代表例で、一度も返済を滞らせなかったことがなく、日本への元本、利子の流入の方が、新規の拠出額よりも多くなっています。アジアの国はいずれもそうです。それだけアジアの成長・発展が成功したともいえるのでしよう。ODAと民間企業の力が集約されて、産業集積

が生まれる、それがアジアの個々のリーディングセクターになるといふメカニズムが、ずっと展開してきました。しかし、さすがに日本の財政資金が逼迫化して、ODAで拠出する余力がもうなくなってきたのが現状です。国内で深刻化する少子高齢化対策の予算も少ないし、緊迫する情勢の中、軍事費がGDPの1%以下なんて有り得ない話ですが、ではそれをどうするかというところ、削れるのはODAだといわれてしまいます。予算構造としては脆弱です。「国民の血税をよその国に渡すのか」という反応が出てくるのが常です。

そこで期待したいのは、国内外にさまざまなネットワークを持ち、多くのステークホルダーと活動を進めているオイスカが、ODAのアジア発展モデルの成功例を、国内に落とし込んでいくことが必要です。オイスカは山梨でもずいぶん熱心に活動を進めていますね。

**中野** 森づくりが中心です。90年代、特に阪神淡路大震災以降のボランティア熱の高まりもあり、当時オイスカが力



朝の行事では必ず国旗を掲揚する(西日本研修センター)

## オイスカに期待すること

**渡辺** 大切なことですね。オイスカは国際協力NGOとして長年活動してきていますが、今後私が期待したいことをお話ししたいと思います。先ほどアジアの発展モデルについて説明しましたが、それを担

ったのは民族資本ももちろんありますが、多くの場合は外資系の企業、特に日本の企業でした。どうして「ものづくり」の日本企業の進出が、あれほどまでに展開されて、各国の発展のエンジンとなっ

て入っていた「子供の森」計画をはじめとする海外での緑化活動に、企業や団体による支援、ボランティア派遣が増えています。あの頃は学生ボランティアも多かったですよ。毎年夏休みの一カ月間、ホテルではなくオイスカの研修センターなどの活動拠点に寝泊まりしながら、毎日植林に明け暮れるプログラムがありました。20人、4コースの募集に対し3倍以上の応募が来ることもありました。そうした日本からの支援やボランティアに支えられ、森づくりが各国に広がっていきま

ったのは民族資本ももちろんありますが、多くの場合は外資系の企業、特に日本の企業でした。どうして「ものづくり」の日本企業の進出が、あれほどまでに展開されて、各国の発展のエンジンとなっ

ると、より近い現場でのボランティアへのニーズが増え、企業などでは社員の家族も含めたさまざまな体験活動を希望する声が増えるようになってきました。東京から近い山梨には、そうしたニーズに応えられるフィールドが数多くあるのです。

**中野** 国内の研修センターなら、海外に行かなくてもいろいろな国の研修生と交流できますしね。オイスカには本当にたくさんの方のフィールドがありますから、すでに大学で受け入れをしているケースもありますし、今後も積極的に大学との連携を進めていきたいと思っています。今日は示唆に富んだ数々のお話、どうもありがとうございます。

**渡辺** まさにそういう活動が求められているのだと思います。拓殖大学では、学生にフィールドで仕事をさせて、しっかりとしたレポートを作成して、責任者のサインをもら

ったのは民族資本ももちろんありますが、多くの場合は外資系の企業、特に日本の企業でした。どうして「ものづくり」の日本企業の進出が、あれほどまでに展開されて、各国の発展のエンジンとなっ